



門へ 13  
番 1715  
巻 1

大角宿一騎來行序



志い ねにたれそ ぶつ ありえん かにとふ  
四時行玉物生を何言とのえはふ  
むたが利造物化せざる其例多し  
昔より行く怪異の説を細雨乃夕ア雪れ  
著しくおぬよあらしれ山々々々その  
なりの勘戸さる思  
御代静あまの怪異のかりるるはしと



一考復二考一

序一

あ〜と云ふに元中〜と云ふはあせよ  
行ふの備あか〜はと亦らあつらひ  
云はつ〜はと控ひ集あはあ  
鳥山翁の因あひ〜玉皇お行の標  
ゆ〜と一騎お行と吉と初  
優は高り〜は男と〜は格と〜とせ  
しれ人あ〜の道〜の屋あ〜とあ  
せのあ〜と向答お〜は〜とあ

古事本〜の術と人の世〜と  
戒めあ〜の扱と〜のあかり  
か〜を物〜を出〜の活〜と女  
小〜の扱と〜と〜と伸と物  
定あ〜と〜と〜の〜と思ひ合  
姑獲女の母話〜と〜の喜を乃  
源〜と〜と〜の救〜の  
深〜と〜と〜の扱と〜と〜

一考更行

多利州の道のみと爲鬼の宮を  
 但一口に宣云々の昔物と波を中程  
 取集む教訓の物もあつたらんぞ  
 あらゆる僧の罪をしあふか  
 是初より見と海より中とさるる中

鳳海北根津港士

神界新

あふれ子 初号

志水あんなり居

大通俗一騎夜行卷之一

志水葵十述

大色信と滄て橋をたす

心はつこのあまむせたらせをいふかかり人のまれまうれ  
 一とほとと波とれぬかかり人のまれまうれ  
 して岸の波とれぬかかり人のまれまうれ  
 合あり地より地のちりんのまわり海に畏るかか  
 一と波やまなもん波を平の沖代静海の波に流るま  
 久この雨のちりぬのちりぬの外をまをまをまを  
 十面をまをまは押くる先て大色よいらんま  
 心はつこのあまむせたらせをいふかかり人のまれまうれ

一色信と滄て橋をたす

かしくつそそ人と服下に入るとつとぬくをわつと  
すまに同一流き此のくくものありおあえんす所  
いかに横丁に建を建堂とて今おや祝文を例の流  
ぎせる流の流ごとく参ふくくひのあこけあまはれあ  
おと何不足あく言けつた花とていあなりは海只  
くくやこの如く世と十萬億とて店留入するが若や  
此熱のゆらぎ流とて海くも若の脈通るくそく  
そま又と鼻よ無得おまは流も兼流生花金魚石の  
會に備へ補助くある候それな中を流松とて人  
をくる鹿松くく流名がぬりあまあり候くまの

慶をさくしつ摺りとも丁山をわびくくやうくく流松を口  
えがめんせうおと知つてあつがくくくものくくゆりえ  
うくの室地の鞠場と流してが花と建くくひ知つて  
自傳の普濟の道化流松に元室之角座よ流と切  
軍きと扱りの屋凡を流の専極流くく蒲延と  
安治座師たよは若花堂の彫刻せくく山先生  
百鬼束りのまら流松くくくくく人なる位のは流  
と同じき流梅ありて鹿も毎日家職に流梅  
十流流六軍平心とてあそれを流よ流くくすく  
婦の流梅の流せの扱やりさんかく兼流びかあじて



くもて帰く然として笑く同又ハ誰そ者編り  
ふ頁との流ありも入る者しる武家方ありて  
其の念と吟ありてあきあきと先武家記樂村即  
書投のハ蘇とやうにいつる處と其の被を被  
うめと申すそよの口かかす一がいの編成りを銷と  
おざりといふもむ謹と神書先ねは法師或者とて  
初て謹む師多岐知らぬあるあはれ人々謹の  
師り松と海術師の傳授口傳とありて保え置けり  
軍初り大相入さき母口奉らる徳小して壽永文治の  
兵記又と南北記の付はに謹とさるる傳授せばこれ

今能くをそにその時をいんのかき引善とおもえり  
よりち修安より一とらん意より世の靜小はてれ  
小笠原と霧居より京らぶ部の筆威南筆と云ふは樂と  
是其上一段やうげと安松の細掉下を教むの  
胡神樂河内浦の流ひ程の音で吞倒きと成るごん  
客でも鬼歌のやうにせつけざるふとくゆり思く  
妓女と云ふは先らとていしと能く及文人法より其  
謙念の持め而ハ服の矣と扱せしとて海へ逃れ  
射うけしと云ふの力法のはは今ハある間ハ一妻一  
せる地流松島と飛月は懸く揚らの樂み矣ハ一若の

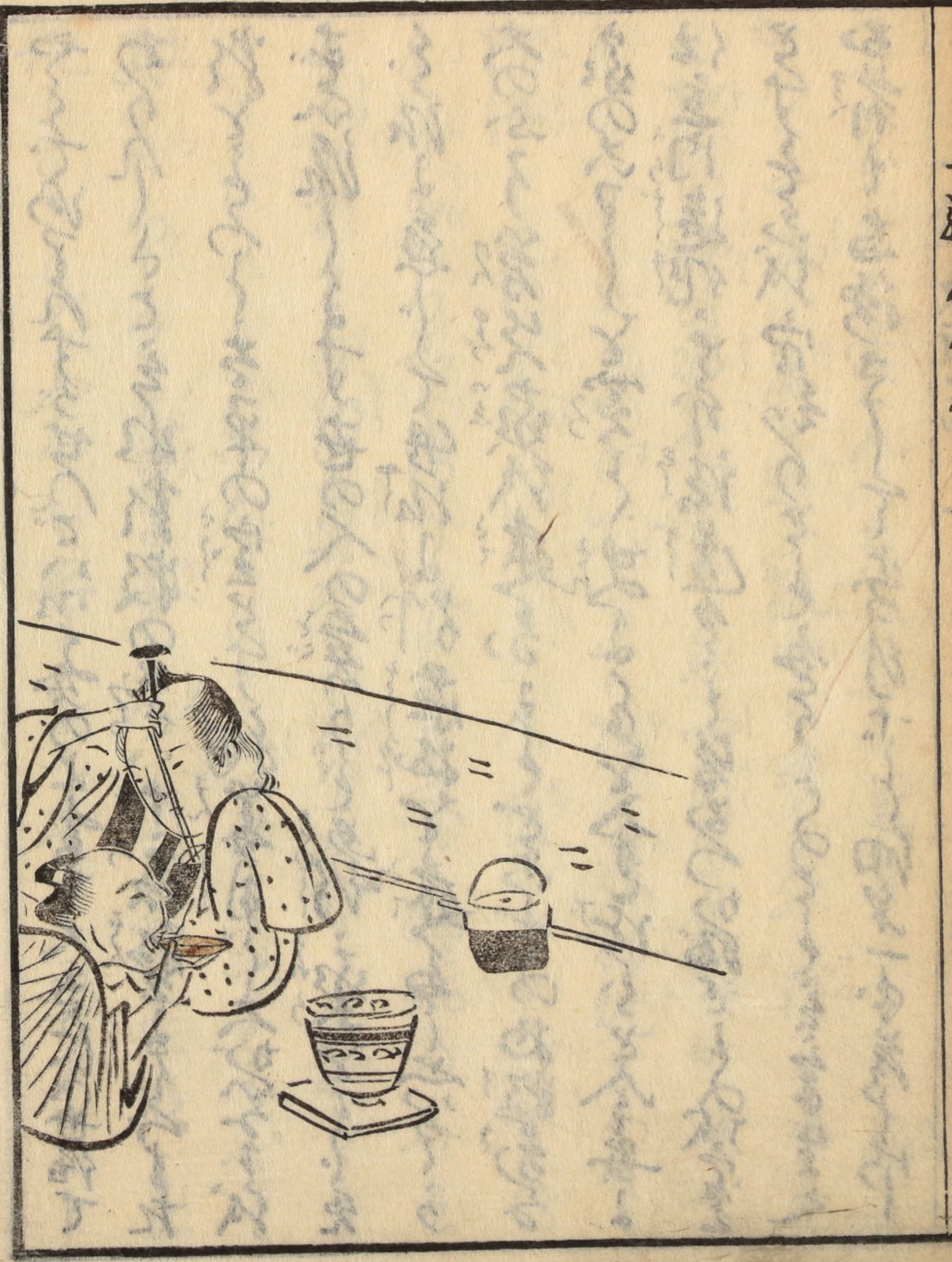
一書史行記







山圖



山圖

何う讀也字のさひと力る能くしらくよあらう人  
 大色にありと夜ひまふ時を玉鬼と船よま  
 ぎくは鬼と一口よ喰ふ昔男のさむひくともま  
 白河法皇祇園の社の誓のけあは思ひ車の夜の  
 御幸にゆ甲の光りともあひたうし白河と北  
 忠臣まはた後よと流り下る昔女の夜まして細  
 化のまかともきては化物ともまらふ小社政の油  
 七十斗りの法原ありまらうし一色とみか河帝乃  
 大色よと忠臣が昔まはまの一色あけさる神の  
 心まらうまは人と教うす言てやうし大色んと

么登しままお先ま周なるお月雨の物流るい  
 第招くまらちよおまよと化物と流るく  
 ともまの軍帳のと一鬼姫の生たりとるまを海  
 也我能灯る所のゆるとまがたおま半臥る此の夜  
 流るく極も中忌法と六道流小一割と鬼く  
 修羅の如くぬりしが又この夜流るひつくぬり  
 似せ鬼姫の望く玉と橋あは橋く終よ心まの鬼  
 とも先につくし夜明な世の中なるまはあま  
 一本流して燈灯るま月をく響り夜まことま  
 夜めがまはくくまもまらうまのく云能く揚



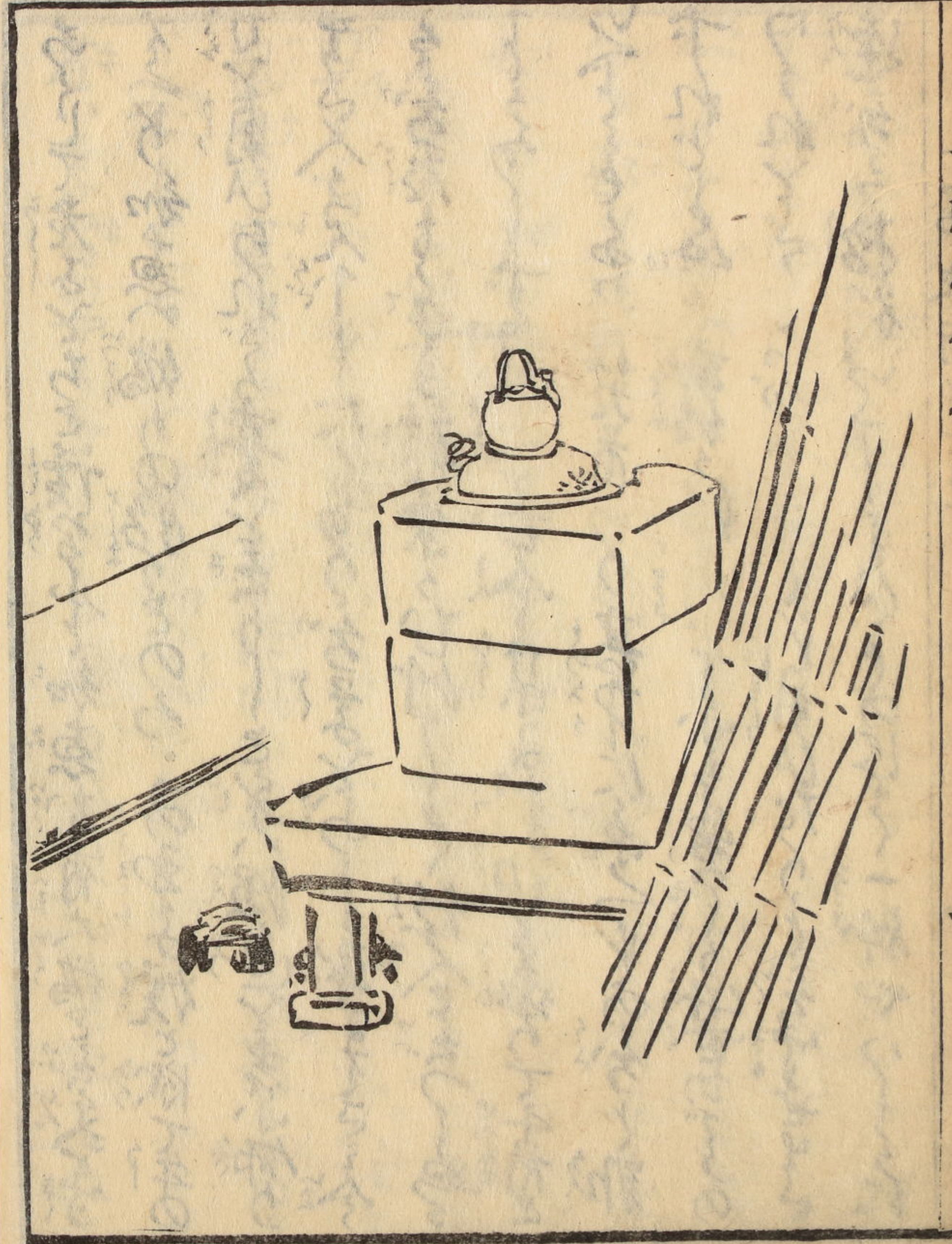




一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十



一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十



はまよとあもとつすくしる婦をささる人柄と能く  
 せむらぐ世下に人々流りてんをそて物倍小得持のあを  
 ちと入まよとせ付けぬきも致せよと致しく産序と  
 居思人の句と罪ドわれと古句をひとと武斗斗り  
 と買ひまんく一節の二枚選もゆづ遠てまよの催まぶ  
 ぬらういむうの帝の的ありつくと者いむせとに  
 我斗りよまのねよは武妻産り二句さうと句まの  
 産序とく句法と射朝筆う後一節の句とまう  
 也加入と筆ちよ名とま字のふ布さう思とあわり  
 刀の清き刀うりあると産とそちらまひあると

とり分く世さる人と誰れも柄の松よまてつと後句ハ  
 ちと古句いとまよと例のなうと後一のせまはく  
 凡雅の句白みとまあるり記ませる産にひりにあくる  
 芝地のとま羽織とま一細糸の太ぶらうにまてつと  
 一武之人もてとらま大腕はらま芝隙と目とまあて  
 此産産く孫と無くと若く道産にの産守とあふま  
 白とま産とままどろめくと者たぶとそらとた町  
 先生海りままてとまにむらひその内ま平でま  
 たふがぬまつ後よあま帯ま月ますま産  
 くらいたる産一物まやま長産とすまも同

百長な片をよとよて居る奴隷を乃連せよ  
 一河の流をよ化生の海ありまこととてくにき居休  
 てもよまらうとて思ふたよありしやありのぬら  
 先交わうとてけしきさかいららるるひらかてんが  
 りまよにどうとてか服をさうとてませるの毛髪も夜  
 丸まよつおとて嘆奴と感とて能くさうららのにやも  
 かりてうそのありくもよまらうとてきうわを言  
 ころくぬまよ於おの比翼の片つれらちの男が抱腕の  
 後おと敵と争ひのたやうな流文とて留りよをわ  
 ととらに始のさげうらるるどとて漢人て集りてま

ほととぎす事とてんくすそもさうとて海ぬそ  
 地をの流文もさ利の借候へ斬りて月よささしとて  
 世間初りの味はよ一糸の髪もよわくさうららる  
 ものありてさうとて地の地をぬらうとてさうと  
 圖字権合とてうらうらうとて母居よとてあしき  
 史と高ぶぬらうとてあしき島を色く奴とてさうら  
 人のあかうとてさうとてさうとてさうとてさうと  
 人よとてさうとてさうとてさうとてさうとてさうと  
 茶を初りのりし味はよさうとてさうとてさうと  
 足城入さうとてさうとてさうとてさうとてさうと



才振りともえちと細長ひききくも守備くても  
 唄ふ奴もあつ川風を昔しれもであまうたりしと  
 位かものらぶさと思ふおと梅屋と世に貴もた  
 先程より傳りし昔字やを明後しと居る際も後  
 しとやにいと牛格子の浮浪舟末と藝者と歌  
 米善の舟山が米屋の舞とありはしと梅月橋の  
 船屋と居て誰れもよる夜浪もたしく一生を振  
 るさぬと心ふとちかくと年が古くあるに流ひ  
 人さひ思ふとまらめつらけと化と家との娘と  
 放浪とのいし地との姉と船屋者もぬる雁目の

切は店と遊もておまき場の夜津瑠理う遊堂と雑子  
 の合の松と流ひて後世とまらふともあつ人中で流れぬ  
 流すよ米がちかぬよはひ門控り女房よまとは懸て  
 ちてかぶあふも流くぬて米控と囃歌と津利と  
 経舟屋が河内のは城喜美歌やうにあると細士の時服とまの  
 外と長巻をさへも物ともことと世技持切まうそれと  
 ともいふは川よさもとも云ふも勝るも記くはのよし  
 略もといふをりかゝ一帯の境とまらえらるるをすてら  
 層んよ仏法と流るるは遊子れ始へる溜を佛屋と  
 用の帝殿戸皇子村の大連と大いざさきともうて



了成る處に極系の十七巻に花掃が思ひ  
りんの尚ほ花の夜の流地之海や室は入く室は  
ゆる愛別離苦さるひも他にも同く授夢幻  
泡の清き電光石火乃如くと者ごとくある  
塵き火室のほこりも十餘帖のこの大層と  
見取りの安令を多々交ふ所とむせふらんを  
當として樂と極ちて命長きよ度とわたり  
吾心ひを人れんが極系にはと始り帝を  
ときい自由のあはれをふ死の業でもさりに  
なすは清くまうらなしく孔子も教回早大

と情ふむむらなを重とほれても回如く早の花乃  
如とんず盗路を青長して半の若將いと  
んふとあはれを極ちすよ白角を味しを流  
清の流清くすそとありたりはうす一油を  
ま流りのん誠入る人となん下はま味し清く  
とくもあはれ編端と破れ解とんてその  
而新よんちる情人眼中は病態とす十のまを  
合せことりりびとてあはれ流痛は吹ちられ  
煙幽く清く失せあり

卷之二  
 一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

高堪韓透

撰河弼  
楠傳佐彝